

論文審査の結果の要旨

氏名：成 田 正 人

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：帰納を巡る一般化と未来の問題－ヒュームを手がかりとして－

審査委員：（主査） 教授 永井 均
（副査） 教授 丹治 信春
経済学部教授 伊佐敷 隆弘

十八世紀のデイヴィッド・ヒュームに端を発する「帰納の問題」は、これまでに多くの哲学者が論じてきた伝統的な哲学の問題の一つである。だが、近年では、「帰納の問題」それ自体に焦点を当てる研究はほとんど見られない。なぜなら、彼自身が論じるように、帰納的な一般化を（合理的に）正当化することは、やはりどうしてもできそうになく、それゆえ、帰納的な一般化の正当性の問題は、懐疑論的にしか解決されそうにないからである。本論文は、このような背景のもと、再び「帰納の問題」そのものに光を当てる意欲的なものである。とはいえ、本論文が目指すのはその（合理的な）解決ではない。彼の経験論的な知覚論を手がかりに、われわれの帰納（的な推論や信念）には、一般化の正当性の問題とは独立に、未来の経験の問題があること、また、われわれの帰納に本当に問題になるのは、前者の「認識論的な問題」でなく、後者の「形而上学的な問題」であることを描き出すことである。

本論文は大きく三つの部に分けられる。それら三つの部には、それぞれ三つの章が割り振られるため、全部で九つの章から成ることになる。

第1部では、ヒュームの知覚論と経験論が確認される。第1章では、彼がわれわれの知覚を①印象②記憶③信念④空想に区分することから、それら四つの知覚を分ける活気（の程度）は現実（や現前）の感じである、と論じられる。第2章では、彼の「第一原理」と「青の欠けた色合い」が検討され、印象と観念の類似関係は「観念の関係」であるが、印象と観念の因果関係は「事実の問題」であることが指摘される。そのため、本論文の解釈では、「青の欠けた色合い」は彼の「第一原理」を（実際に）反証するわけではなく、それゆえ、彼は自らの「第一原理」を固執しうることになる。第3章では、彼の知覚論や因果論に援用される「思考可能性の原理」が取り上げられ、われわれには（なぜか）印象が経験されうるのでなければならぬことが明らかにされる。さもなければ、そもそも彼の経験論そのものが可能とならないからである。

第2部では、帰納を巡る一般化の正当性の問題が検討される。第4章では、次の一回の信念を生む帰納と一般化の信念を生む帰納が定式化され、彼の知覚論を下敷きに「帰納の問題」が概観される。また、彼の因果論もそこで確認される。彼の因果的な推論や信念は本質的に帰納的な推論や信念だからである。第5章では、なぜ「自然の斉一性」が帰納を（合理的に）正当化しないのかが再考され、彼の論じる「帰納の問題」が通観される。また、――標準的な解釈に倣い、――そこには帰納を巡る一般化の正当性の問題があることが明らかにされる。なぜなら、帰納（的な推論や信念）の正当性（の問題）は、次の一回の信念を生む帰納でなく、一般化の信念を生む帰納に帰着するからである。本論文ではそれは「帰納の認識論的な問題」と名付けられる。というのは、そのときに論点となるのは、われわれの（帰納的な）推論や信念（それ自体）の正当性だからである。第6章では、「帰納の認識論的な問題」の懐疑論的な解決が取り上げられる。原因と結果の必然的な結合や「自然の斉一性」は一般化の正当性の問題を（合理的に）解決しないので、歩むべきは懐疑論的な解決の方向である。ヒューム自身はそれを自然（本性）主義的に解消する。つまり、帰納（的な推論や信念）は、（原因と結果の恒常的な接続の）習慣と（現前する）印象から、自然と生じるときに、正しい（とされる）のである。また、帰納的な信念の（大まかな）正誤は確率論的に定義されうるといえる。というのは、彼によれば、そこには異なる「確信の程度」が伴われるからである。さらに、彼の「真理の対応説」によれば、帰納的な信念は、「現実の存在」と対応し、真理値を獲得しうるといえる。すなわち、準実在論的な解釈に倣えば、帰納的な信念は、「想像上の基準」と合致するとき、真（理）となるのである。

第3部では、帰納を巡る未来の経験の問題が考察される。第7章では、われわれの帰納（的な推論や信念）には、一般化の正当性の問題からは独立に、未来の経験の問題があることが描き出される。本論文ではそれは「帰納の形而上学的な問題」と名付けられる。なぜなら、そのときに論点となるのは、われわれの（過去と）未来の経験のあり方（の違い）だからである。われわれの帰納的な信念には、確率や基準か

ら分かる正誤とは独立に、印象の現実が突き付けられる。だから、このときには、帰納的な信念が対応する「現実の存在」は、現前する印象の現実であることになる。だが、印象の現実は今（ここに）現前する現実である。そして、われわれは、過去の印象は経験できないが、未来の印象は経験できる。そのため、過去に関する信念には——「認識論的な問題」は生じるが——印象の現実との対応は問われない。しかし、未来に関する信念には——「認識論的な問題」だけでなく——さらに「形而上学的な問題」が生じる。すなわち、未来に関する信念は、印象の現実に対応し、本当に当たったり外れたりするのである。第8章では、われわれの（自然な）帰納に本当に問題となるのは「形而上学的な問題」である、と論じられる。帰納を巡る二つの問題のうち、「認識論的な問題」は（一般化の）観念の問題であるが、「形而上学的な問題」は（未来の）印象の問題である。つまり、前者では、どんな（一般化の）観念が思考されるかが問われるが、後者では、どんな（未来の）印象が経験されるかが問われる。また、前者は一般化の信念を導く帰納に生じる問題であるが、後者は次の一回の信念を導く帰納に生じる問題である。そのため、それらは互いに独立の問題だとされる。われわれは（過去の）観念がどうであろうと、まったく困らない。われわれの経験は何も変化しないからである。そこに生じる「認識論的な問題」は、外的な対象や他人の意識の懐疑論のような、「帰納の懐疑論」でしかない。しかし、われわれは、信念が的中しないと、本当に困ることになる。すなわち、（未来の）印象がどうであるかは、われわれの経験を変えるので、われわれを本当に悩ませる。それゆえ、ここに生じる「形而上学的な問題」が、本当の「帰納の問題」であるとされる。第9章では、ここまで棚上げにされた帰納と時間を巡る三つの問いが（少しだけ）述べられる。第一に、（未来に）印象が生じることは、「観念の関係」であるのか、それとも、「事実の問題」であるのか。また、もしそれが「事実の問題」であるのなら、そこに「帰納の問題」は生じるのだろうか。第二に、われわれ（の知覚や経験）を離れても、過去（の存在）と未来（の存在）は非対称的であるのか。もしそうであるなら、そもそも世界には「帰納の存在論的な問題」があるのだろうか。第三に、「帰納の形而上学的な問題」は（われわれの）今の問題であるのか。もし（われわれに）今がなければ、帰納（的な推論や信念）には——「認識論的な問題」は生じるだろうが——「形而上学的な問題」は生じないのだろうか。

かくして、本論文では、われわれの帰納（的な推論や信念）には、一般化（の観念）の正当性の問題からは独立に、未来（の印象）の経験の問題があることが解き明かされ、また、それらのうち、われわれの帰納に本当に問題であるのは、前者の「認識論的な問題」でなく、後者の「形而上学的な問題」であることが描き出されるのである。

まず、本論文で主張されるのは、帰納（的な推論や信念）に関して、一般化の正当性の問題と未来の経験の問題を峻別することであるが、これら二つの問題の対比は簡明で説得力がある。標準的には「帰納の問題」は一般化の正当性の問題である。それゆえに、（過去や未来の）時間の問題が「帰納の問題」に本質的であるという主張は、本論文に固有の興味深い論点である。さらに、本論文では、外界の対象や他人の意識と違い、帰納には、懐疑論の問題だけでなく、実際の（未来の）経験の問題がある、と論じられる。本論文では、なぜ「帰納の問題」だけが他の懐疑論と異なるのかは十分に探求されていないが、「帰納の問題」と他の懐疑論との差異が明らかにされたことは哲学的に意義のあることである。また、本論文は、ヒューム（の知覚論）における過去と未来の経験の違いを強調し、それを（彼の）「帰納の問題」に本質的な問題とする点で、ヒュームの解釈的研究にも一石を投じるものであると思われる。以上から、本論文は独自の優れた論点を有するものであると言える。

本論文で惜しまれるのは、なぜ（過去や未来の）時間の問題が帰納の本質的な問題になるのかが、それほど詳しく論じられていないことである。それを明らかにするためには、時間の問題そのものをさらに探求する必要がある。たとえば、第9章で述べられた三つの問いに切り込めれば、本論文の主張にはもっと説得力があったのではないだろうか。また、本論文では、一般化の正当性の問題と未来の経験の問題がそれぞれ「認識論的な問題」と「形而上学的な問題」と名付けられるが、この名付け方には疑問がある。なぜなら、帰納的な信念が本当に正しいかどうかは未来の経験から分かるのであれば、そのこともまた「認識論的な問題」と言えるからである。しかし、こうした諸点は考察を深めるべき課題として残されているが、それは本論文の成果を損なうものではない。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

平成29年1月26日